

2015年より活動する映像上映シリーズNormal Screenにおける国外の作家・作品の日本での紹介、共有、考察のためのリサーチ及び、作家やキュレーターとのネットワーク形成のために代表の秋田祥がバンコク、ホーチミン、ハノイの3都市を訪問した。

Normal Screenは主にセクシャルマイノリティの経験を挑戦的な態度で表現する作家や作品を紹介しており、本リサーチでも、身体やセクシュアリティ、アイデンティティに強い関心のある作家とキュレーターと面会した。また、Normal Screenがギャラリーでも映画館でもない空間であることを特徴の1つとしているため、訪問地でも“オルタナティブアートスペース”と呼ばれる空間を視察した。

従来の表現の枠や形に縛られないセクシャルマイノリティによる表現はよく「クィアアート」(Queer Art)と呼ばれ、欧米では1980年代よりアカデミアの現場でも盛んに研究されてきた。このフィールドでは多様性やグローバリゼーションの影響を無視することはできず、国を問わず世界中の動きを捉え研究し、そして楽しむ傾向が近年強くなっている。しかし、アジアからの発信がアメリカ大陸の国々や欧州よりも少なく、現地では何が起きているかというのは、世界中の研究者や鑑賞者の注目的でもある。現在の東南アジアにおけるクィアアートとは何なのかを探ることは目的の一つだが、同時にその「クィア」とは西洋でよく用いられる言葉と考えであるために、アジアではその言葉に縛られずに研究、受容する意識が必要であり、またそれは様々な意味で“別の”表現に出会うチャンスでもある。またこの分野とそこで活動する作家やキュレーターは、社会的少数派であり、抑圧を受けてきた過去があり、現在でもサポートシステムが少ない。そのため、その状況を少しでも肌で感じることで、国境を超えたネットワークの形成は重要である。

帰国後、プロジェクト名を『OMBRE』と名付けた。色のグラデーションのことで最近のグラフィックデザインでもよく見られる。リサーチの過程で境目なく色鮮やかに、そして滑らかに広がる世界を感じたからだ。また、今回面会した人々は、物事の二極化に疑問を持ち、人間のもつ柔軟性を信じる人々であるため、このタイトルが相応しい。

リサーチ結果は主に3つのタイプで発表される。映像関連の作家との面会はNormal Screenの上映企画として成果が発表・共有され、映像以外の作家との面会はNormal Screenのウェブサイトの記事を発表する。訪問したオルタナティブスペースもウェブサイトで紹介され、概念にとらわれない日本国外の活動から、日本国内のキュレーターやアート関連者への刺激になることを期待している。日本からの旅行者ももちろん利用できる。

OMBRE

バンコク、ホーチミン、 ハノイで身体や セクシュアリティなどに 関心のある作家及び アーティスト、 コミュニティ支援の 活動調査

フェロー 秋田祥 / Normal Screen

・記録
バンコク(6/6-14, 2016)
ホーチミン(6/16-20)
ハノイ(6/22-28)

・今後の予定や展望

・所感

提出日:2016年7月27日

Bangkok 6/6-14, 2016

・「現地に着いたら日程決めのためにまた連絡してくれ。」事前に連絡した作家やキュレーターにはそのように言われることも多く、大まかな計画とともに羽田空港を旅立った。そのため、バンコクに到着してから予定の調整が始まった。案の定、ゆっくりとスタートしたこのプロジェクト。はじめて訪れるバンコクは雨季の入り口で日中は猛暑だが、朝夕は暑さが落ち着いていた。



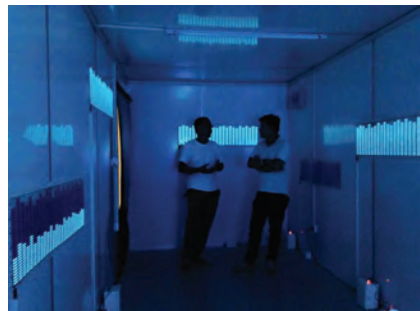
・タイにはリサーチ段階で非常に気になっていた若い映像作家が6人ほどいた。そのうちバンコクに住んでいる数名の連絡先をブーケット在住のキュレーターにすでに教えてもらっていた。偶然にも彼らの多くは「Film Virus」という映像上映シリーズで繋がっており、しかもバンコクの交流基金もフィルムの貸し出しなどで彼らの活動を支援していたことを後に知る。



・その1人Ratchapoom Boonbunchachokeは、映画やドラマのスク립トライターの仕事をしながら、自身の映像制作を続ける。大学卒業頃までは、自身のジェンダーとセクシュアリティを作品テーマに追求していたが、現在は政治に強い関心を持ちながら制作をしている。作品は事前に共有してくれていたので鑑賞済み。作品はタイにおける「ポストコロナリズム」をテーマにしており、非常に興味深い。はじめはとてもシャイだったRatchapoomだが、気がついたら饒舌で4時間以上、彼の作品やタイの映画、ポップカルチャー、歴史、政治、多様な民族と宗教について、とても詳しく熱心に説明してくれた。



・彼と面会したバンコク芸術文化センター（BACC）のカフェには若い作家がたくさんいて、気軽に作家が集まれる美術館というのはいいなと思った。しかし後に色々な人に、BACCの成り行きや、不満なども聞くことになる。「アートのモールみたい」と感じた私の第一印象は間違っていなかった。交流基金による過去のアートマップでBACCのこれからを懸念する記事があったが、私が3度ほど訪れた全回とも、来場者は少なくなく企画展も見応えがあった。日曜日に訪れた地下の図書室は混んでいた。



・映像を全く使わない作家で、じっくりと話を聞くことができたのはJakkai Siributrだ。彼は1990年代後半より活動を続けており、来年はBACCでの個展が控えているという。同世代の作家に会うことの多い私は、緊張しながら彼の実家兼スタジオを訪れた。主にタイの作家の平面作品がサロンスタイルのごとく多く飾られた広くて立派な玄関?で基本情報を交換した後に、スタジオで彼の過去の作品、制作中の作品両方を手に取りながら説明してくれた。刺繍を多く施し鮮やかに民族文化や物語が見え隠れする彼の作品だが、軍用の制服や柄もよく使用し明らかに政治的で、彼の作品のタイ国内での大きな展示は未だ行われていない。タイ全体の政治を題材にしたものが多いが、タイ南部タクバイのデモで逮捕された市民のうち78人が輸送中に亡くなった事件を扱った作品『78』のように、南部におけるイスラーム教徒への圧力だけを扱った作品もあり、バンコクの外の少数派におこる苦難にも意識的だと感じた。バンコクで出会った作家の殆どはバンコク外での問題にも強い関心を持っていた。玄関?に戻り、話を続けていると、ひっそりと角に飾られた写真作品に私の目は奪われた。青年が枯れた木の枝を傘のように持ち、腕時計をみつめている。タイトルは『Unworthy of Waiting』。するとJakkaiがその作品の説明をし、結果的に作家を紹介してくれた。

・その作家とはTada Hengsapkul。面会当日、落としたスマートフォンのようにぼろぼろのマックブックを開き、自身の作品について説明してくれた。彼の作品は、まるで友人の服を脱がせカメラを使って遊んでいるようにも見える。しかし、どの作品もシンプルながら、そこに写るものほぼ全てに強い政治への不満や疑問が埋め込まれている。中国での展示では、作品の撤去を命令されたこともあるTadaは、バンコクでの展示でも慎重にならなければならない。しかし彼は「規制されることがあっても、それを意識して自らの作品を自分で規制することは絶対にない」と穏やかな笑顔で言う。彼には、奇をてらったことをせずに、でも何かものすごいことをこれからやってしまうような特別な（不思議な）力を感じた。近頃は映像や音楽も手がけるようで、自身の写真作品の延長のようなミュージックビデオを彼の友人のバンドのために作成していてとてもよい。別れ際、ギャラリー Nova Contemporary Artを紹介してくれた。聞いたことのないギャラリーだ。



・Nova Contemporary Artでは広島のみやうち芸術文化振興財団が関係している「Today Is The Day: The Proposition Of Our Future」が展示されていた。ギャラリーの若いダイレクター Sutima Sucharitakulにここにたどり着いた理由を話すとギャラリーが所有するTadaの作品を実際に見せてくれた。そして彼女と、タイの女性作家の話になった。女性作家はもともと少ない上に、最近は女性作家の殆どが写真家だと少し残念そうに言った。空間はとても落ち着きがあり、近くの歩行者もこのギャラリーについて知っていたが、実は今年の4月にオープンしたばかりだという。



・他にも新しいアートを訪れた。TARS Galleryは2015年にオープンしたアーティストランスペースで（TARSという名前はThe Artists Run Spaceの略）、ギャラリーにはオーナーのPierre BèchonとPokchat Worasubがいた。レジデンシーもやっているものの、まだ若い団体なので助成金を得た作家の活動先として場所を提供したり、状況に合わせて活動しているという。もともと3人で始めたが、現在は2人：Pierreは元パフォーマーで今はキュレーションに集中し、Pokchatは写真を使う作家だ。このスペースは週に3日だけオープンし、それ以外は予約制。マーケットの流れやトレンドを意識しない、作家の実験の場になりえるようなエッジな空気を感じた。



・Saphan Taskin駅の近くにあるBridgeは2014年の7月にオープン。バンコクで駅から汗をかく前にたどり着ける数少ないこのアートスペースの1階はカフェバーになっている。発起人はイギリス出身のDan Burman。1階カフェスペースも天井が高く、作品を展示できる壁と空間がある上に、2階と3階もギャラリーになっているので、いわゆるカフェギャラリーとは一線を画す。上映会も音楽イベントもするというこの空間は、柔軟に様々な表現やアートコミュニティを受け入れているようだ。



・ Bridgeから徒歩圏内のバー JAMでは、主にレズビアンをターゲットにしたウェブサイトQueer Mangoの1周年記念イベントが行われていた。オープンマイクで観客が歌ったり詩の朗読をしたりする。バーに入りきらないほどの観客が押し寄せ、大盛況に終わったイベントのあとQueer Mango代表の2人 IlariaとNedineに話を聞いた。彼女たちは、ここ数年でタイでも認知が広がるLGBTだけにむけてイベントをするのではなく、女性や様々な少数派の人々も参加したり、彼らの存在や直面する問題も同時に考えていける場所としてQueerという言葉を使っているという。

・他に、クィアコミュニティとアートが交わる場所として Bangkok Gay & Lesbian Film Festival(BGLFF)を視察した。まだ二回目で、プログラミングは映画『The Blue Hour』などをてがけるAnucha Boonyawatana監督がしている。米国オーランドのクラブPulseでの銃乱射事件の直後だったため（5月にはメキシコのゲイバーでも乱射事件があり7人が死亡という情報も同時に流れる）、一つの空間にセクシャルマイノリティが集うことに強い意志を感じた。それと同時に、LGBTQの人々にとって「安全な場所」とはどういうことなのか、何を意味するのかということもNormal Screenのためにもあらためて考えた。これについてはその後も何度も考えることになった。BGLFFの集客はパツとせず、話を聞くと昨年の第一回の際には、もっと少なく気まずいほどだったという。ここでしか観ることのできない国外の映画がたくさんあり、チケットの代金もハリウッド映画より割安で、都市部で行われ場所も便利なのに来場者が少ない点は興味深い。出会った人々とは熱心に国内外の映画について語ったが、彼らのような映画好きは私が思っていた以上に少数派なのだろう。



JAM Factory

・映画といえば、国外の映画祭でも名が知れている監督 Thunskha Pansittivorakul (苗字なしで発表の作品も多い) が現地で面会を承諾してくれた。現在、Thai Film Archiveで撮影をしているということでVictory Monumentからバスに90分ほど乗り向かった。Film Archiveは現在新しいビルを3棟同時に建設中でより広い新たな施設が完成予定。撮影の休憩中に話をしてくれたThunskhaは想像以上に話しやすい雰囲気だった。Thunskhaの作品には、男性間の愛や欲望を堂々と表現した過激な描写が多く、タイ国内で作品が正式に上映されたことはない。精力的に年に数本の短編をてがけることもあったが(交流基金の支援を受けて訪日あり)、近年では長編を続けて制作。しかし、あまりインタビューなどには応じていない。その理由は、目立った活動や発言をしたりすると身に危険がおよぶからだという。今回出会った多くの作家に言えることだが、作品中で比喩的な表現をすることは問題ないが、それを説明してしまうと検閲やそれ以上の危険の可能性があるのであるためだ。大きな制作会社を持つわけでもなく、インデペンデントで活動を続ける作家として恐怖を感じているのも正直なところのようだった。そういう話を特別にしてくれたThunskhaの作品は日本でぜひ上映したい。別れ際「次は誰に会うんだ」と聞かれ「知らないと思うけどChamaという若い女の子です」というと彼がごそごそと考えたあとに「チャマ!あいつはモンスターだ!」と言いグラグラと笑い始めた。ChamaはThunskhaの過去の教え子だという。

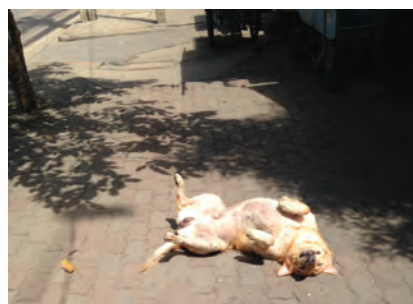
・Chama Lekplaは現在は映像制作をしていないため、連絡先を見つけるのに苦労した。作品の映像はインターネット上には存在せず、見るができなかった。少ない情報のみが存在したが、それでも直感的にどうしても会いたかった作家。彼女は英語が苦手なため、英語を話す親友で彼女の作品の編集も手がける友人Pea Panuvatvanichを連れてきてくれた。Chamaの作品は、彼女が大学生のときの作品で、卒業してからはシナリオライターをしている。スターバックスで、彼らが持ってきてくれたノートパソコンで15分の作品を見せてくれた。性への好奇心と探求心にあふれた作品を見終えた直後、彼らに会うことができよかったと思った。諦めずに連絡先を探し続けてよかった。それほど、彼女の作品は期待以上だった。Chamaは現在、久しぶりに映像制作の準備をしているという。Peaは現在Bangkok Universityで映像を教えている。タイで映像や映画を学ぶ学生数は急増していて、Bangkok Universityでは、他の学校の5倍ほども映像を学ぶ学生を受け入れているという。



・バンコクでは大学内にある3つのアートセンター／ギャラリーも訪れた (Silpakorn University, Chulalongkorn University, Bangkok University)。どの大学でも、アートスペースの存在すら知らない学生や職員が多く、敷地の広い Chulalongkorn Universityでは外で作品を作っていた芸術学部の学生の集まりに聞くと誰も知らず、みな熱心に地図を見ながら、ここではないかと探してくれた。バンコク全体における「アート」の位置のようなものを感じられた。もちろん、3箇所ともギャラリー内に鑑賞者はゼロ。しかし、どこも評判通り、展示内容はとても面白かった。Silpakorn Universityでは、発言の自由の制限について考えさせられる展示「Two men look out through the same bars: one sees the mud, and one the stars」が行われていた。Chulalongkorn Universityのアートセンターでは「Oscillation」というグループ展が行われており、隅英二の作品も展示されていた。

・ワットポーと王宮もまわった。たまたま国王の即位70周年の日である6月9日に訪れてしまい落ち着いて見ることはできなかったが、そこで盛り上がりの様子を目の当たりにできたのは面白かった。タイ人の生活と深く関わりがある王室をとりまく環境を知れたことは意味深い。作家でも、タイ社会における王の存在や、王を暗喩的に言及する人たちが多く、実際にその空気を感じられてよかった。映画館も訪れ、そこで体験する上映前の国王讃歌の雰囲気も知ることができた。私が見たものは、最新のもので歌は流れず、カラオケのように音楽にあわせ歌詞が流れるだけだった。

・滞在前半に会ったRatchapoomとその友人であり、映画プログラマーのChayanin Tiangpitayagornとはタイの映画やテレビを取り巻く状況についてお茶を飲みながら朝まで (!) 語ってもらった。インターネットでは、どういう表現や表象が存在するかを知ることができても、社会におけるその位置付けは、やはり察することしかできない。メディアを鋭い眼で見る彼らから聞くことで、ポップカルチャー、大衆受けしているもの、そうではないが存在するユニークな表現などの盛り上がり（または盛り下がり）の温度を知ることができたように思う。



上から
Silpakorn University Art Center
MahaNakhon at Silom/Sathon
Pangina Heals at Magie Choo' s
A stray dog

HCMC 6/16-20

・現地入り直前になっても、生憎、面会希望者とうまく連絡がつかなかったり気になる作家を見つけることができなかったホーチミン。まず、Eメールで連絡するも返信のなかったSan Artへ出向いた。San Artのビルでは、これで最後になるかもしれないレジデンスプログラム「San Laboratory」の成果が同じビルの上の階で展示されていた。今年まで8回続いたSan Laboratoryは、政府の圧力によって次回レジデンスの中止を余儀なくされた。まだ再開の予定はない。3名の作家の展示作品鑑賞後、一階入ってすぐのReading Roomという空間で働いていたインターンの大学生に話を伺う。緊張した雰囲気だったが粘り強く質問をしているとプログラムアシスタントのHung Duongを紹介してくれた。昨年、森美術館のイベントにも参加していたZoe Buttは不在だった。彼も初めは慎重だったが徐々に現状を話してくれた。日をあらためて会い、ゆっくりと話すことに。



・今のホーチミンの現代アート界の話題はやはり今年4月にオープンしたばかりのデザイン／アートスペースThe Factoryだった。訪問時には丁度次回の展示の準備をしていて、本当にファクトリーのようなようだった。しかし想像していた以上に小さい。建物に入ったその空間だけが展示空間なので大きなギャラリーという印象。実際次回の展示でも大きな作品1点だけが展示されるという。入ってすぐにスタッフの女性が、案内してくれるも2分ほどで終わってしまった。展示空間と同じ空間にある小さな本屋はまだ空っぽでオープンしていない。2階にあるコーワーキングスペースとして誰でも使えるというカフェのような空間にはスタッフが5人ほど働いていた。そこにZoe Buttもいたので、挨拶。帰りに外のベンダーでバンミーが作られていたので購入しようとしたが、すべてスタッフのためだと言われ断られる。周りは高級住宅街でお店も少ない。ここは街の中心からタクシーで20分ほど（180000ドンほど）かかる。ここにどれほどの人が来るのか疑問に思わずにはいられなかった。



・The Factoryから比較的近いVin' s Galleryは近頃ショップをオープンしていた。ここは2階で行われるアート教室が主な事業となっているようだった。



・ Galerie Quynhは1区のドンコイ通りにある有名なオールドアパートメントの中にあり、確かに歴史と個性を感じる。しかし、このビルは取り壊されてショッピングセンターになることが決まっており、現在新たな、より大きな空間を探していると話してくれた。この時、ギャラリーではHoang Duong CamとTruc-Anhというベトナム人の作品が展示されていて、彼らも映像作品を手がけるという情報をもらった。彼女は、ローカル向けにアートを通した教育活動（ワークショップ）も行っているという。彼女も忙しく、その辺りについて聞く時間がなかったのが悔やまれる。

・ Quynhに教えてもらい、Blanc Art Centerというレストランの2階のギャラリーで行われるというPhan Quangのオープニングへ。日本での作品発表やレジデンスの経験のある作家が、第二次世界大戦後もベトナムに住み続けた日本人の家族を撮ったポートレート展。ギャラリーには作家や被写体となった人々がたくさんいて盛り上がっていた。作品名は「RE/COVER」で文字通り被写体は薄い布を被っている。他にDia ProjectやHCMC Fine Art Museumも訪れた。

・ ホーチミンでおそらく唯一、アートとクィアカルチャーが交わる場所である「Vanguard」というZineの発起人Aidenに会うことができた。Aidenは4歳までホーチミンで育った後、家族で米国のボストンへ移住し数年前から、時々ホーチミンを訪れては3ヶ月ほど滞在している。Zineを通してホーチミンでもクィアコミュニティ、または繋がりをつくろうとしている。そして、裕福でない庶民もアートに触れる機会となることも念頭に置いているという。性的描写を多く含むが、Zineとして細々と販売しているので検閲は通さない。新しい号が発売されるたびにリリースパーティを行っており、それも既存のLGBTムーブメントに属さない当事者にとって貴重な空間になっているはずだ。まだまだ表に出てきていないクィアアートを制作する作家はたくさんいるはずだとAidenは言っていた。



上から
Dia Project
Black Art Gallery
Phan Quang' s RE/COVER
HCMC Fine Art Museum
Aiden of Vanguard

・映像関連では事前に連絡をしていたドキュメンタリー映画『Finding Phong』の監督の一人Tran Phuong Thaoに会えた。映画の上映がAmerican Center Saigonのプライド月間(アメリカ)のイベントとして行われていたので、それに参加。観客がとても若い。監督に連絡をしていたので映画は事前に鑑賞済み。しかし、Q&Aはベトナム語のみで監督には挨拶しかできなかった。同時にもう一人、事前に面会を希望していた映画『Madam Phung' s Last Journey』の監督Nguyễn Thị Thámにも会場で会い、あらためて会う約束をするも連絡がつかず断念。2人はホーチミンで3ヶ月におよぶワークショップを行うことになっており、その準備で大忙しだったのだ。このワークショップに関しては後に会う映像関係者全員が知っておりベトナムの映像コミュニティの小ささと関係の深さを感じた。



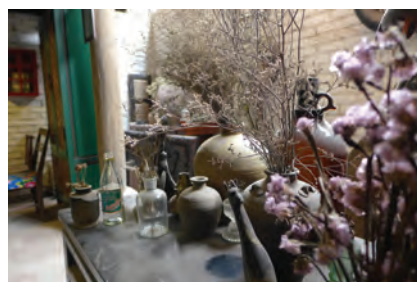
・『Madam Phung' s Last Journey』は長編ドキュメンタリーで、明るい『Finding Phong』とは逆の世界が描かれている。ベトナムのゲイや性転換をしたくてもできない人々が、ドラッグクイーンとしてパフォーマンスの地方興行をする季節を追った内容で、被写体は魅力的でありながら映画には緊張感がある。監督のThámは31歳の女性で、今後の活躍も楽しみな存在だ。



Hanoi 6/22-28

・「歩ける！」間違いなくホーチミンより歩行者フレンドリーなハノイの街がホーチミンよりも充実した日々を期待させる。今回、日本での準備段階で、私がハノイで会うべき人を多く紹介してくれたSwann Dubusに会う。彼は『Finding Phong』の監督で共同監督のTran Phuong Thaoと結婚している。フランス出身だがハノイに長年住んでいるので、ストリートでフォーを注文する姿も頼もしい。彼らは2011年に『With or Without Me』というベトナム北西でヘロイン中毒と戦う男性とその家族や医師を捉えたドキュメンタリーも制作している。きびしい現実を生々しく捉えたその前作とは違い、主人公がどんどんハッピーになり終わる『Finding Phong』について聞いた。実は映画は、ベトナムの人権問題間に取り組む非営利団体Institute for Studies of Society, Economy and Environment (iSEE)のプロジェクトでもあり、ポジティブなトランスジェンダー像を描くというコンセプトが始めから用意されていたようだ。私は、トランスジェンダーの人々が直面する様々な苦悩が映画に描かれていないことに不安を感じた。しかし、ここで自分のなかにある妙なステレオタイプに気づく。私は、ベトナムではトランスジェンダーに関するニュースや情報は存在しないと信じていた。そこにハッピーできれいなトランス女性だけが表象されることは危険だと感じていた。しかし、現実には表象はあり、トランスジェンダーに対する暴行や売春などのニュースが多かった。近年その状況もよくなってきているという。どのような報道や表象があるのか詳しく聞いた。その後、映画のプロデューサーであるCinemathequeのNicole Phamを直接紹介してくれることになり、早速Swannのバイクの後ろに乗り向かった。

・細い道の奥にあり、まるで隠れ家か秘密の園のように佇むCinematheque。12年前の開館時からそこで働いているNicoleはすぐに温かく迎えてくれた。現在のCinemathequeについて聞くと、正直にここ数年は客足が遠のいていることを教えてくれた。間違いなくインターネットが関連しているだろう。でも以前は盛り上がっていたというわけでもない。もともと映画に行くという習慣がないベトナムでアート系シネマをやっていくのは非常に難しい。それでも、ハノイにひとつこういう場所がある、という事実が非常に大切なのだと話してくれた。また、国内外の映画とその歴史を知るものとして、ベトナム映画の今に対する所感を教えてくれた。彼女おすすめのベトナム映画のDVDも貰った。



・『Finding Phong』への出資をしているiSEEを訪れた。彼らは少数民族やLGBTの人権のために活動しており、法整備のためのロビイングやサポートにも力を入れている。他にもジャーナリストに向けたセミナー、全国で地方に住むLGBTをサポートするためのワークショップ、有名人を起用するイベントなどを行っている。彼らの活動はNormal Screenの活動に直接関連はないが、ベトナム社会全体のメインストリームにおける所謂LGBTムーブメントの今までと成長を知ることができた。これは、当事者間でも賛否両論あれセクシャルマイノリティの作家やキュレーターも経験したり見ていることであり、それを肌で感じられたことの意味は大きい。ちなみにベトナムでは性転換を認める法令が2015年に通り、2017年以降に施行される。この準備のためにiSEEは政府に協力しているという。

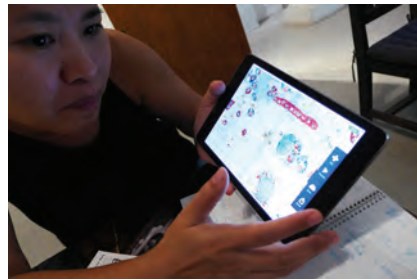


・いずれiSEEで働くことを考えている、というトランスの青年にも話を聞くことができた。彼の名前はChu Thanh Hà。現在、国際NGO Oxfamでフルタイムインターンを1年間続けているHàは、自らの経験は共有されるべきだと信じ、仕事でも他のトランスの人々のインタビュー調査をする。彼が語ってくれた経験は、求職中に受ける差別、ゲイやレズビアンからも孤立するかもしれないという恐怖、祖母からの反感、性転換が違法であるために整っていない医療や保険の問題、鬱など幅広かった。ベトナムのストリートには行き場のないホームレスのLGBTの若者がたくさんいるという。Hàはお土産にと彼が近頃関わったLGBTの現状調査報告書くれた。それを読むと、ベトナムにはLGBTの親の会（PFLAG）が存在するものの、日本ではあまり聞かないような話もあった。例えば、叔母や祖母が親戚や当事者をふくむ「家族」を呼んで、皆の前で当事者の「異常性」を訴えるというものがいくつかあった。ベトナムでよく言われる家族の絆が強いというのは、こういう側面を持っている。当事者の抱えるプレッシャーを考えると苦しい。



上から
iSEE
Hà
リータイトー公園
Six Space Gallery

・思えば今回の旅で出会った人々は皆、個人のストーリーの力とそれを共有することの力を信じている人々かもしれない。Dinh Thi Nhungは、ベトナムのLGBTQに関するもの、場所、物語などをアーカイブしているユニークな存在。英国The Guardian紙でも紹介された彼女の活動は、それから発展し、よりアーティスティックなものになっていた。アーカイブのアイデアの発端はThe Consultation of Investment in Health Promotion (CIHP)だった。そこで初めてアーカイブに関わったNhungは苦勞しながら新聞記事や個人の思い出の品を収集しオンライン上に情報をまとめる。現在でもインタビューを行ったりしながら、街が記憶するゲイやレズビアンをデジタルテクノロジーを使いまとめている。また、キュレーターとして、ベトナム、スウェーデンやカンボジアなどでも、彼女の学んだノウハウを共有し同じような展覧会開催のリードをしている。ハノイでの展示の際には検閲を恐れたりするスタッフも多く苦勞し、実際に検閲も厳しく、その結果、12時間だけの展示がスウェーデン大使館で行われたこともあったという。抑圧されながら育った人々から、その経験を聞くのは容易ではない。そのためには少し工夫が必要でクリエイティブにならなくてはいけない。彼女はそういう小技をたくさん持っているのだろう。彼女と面会した日は、彼女にとって久々に仕事再開だった。その理由を聞くと10日前に甥が亡くなったという。そして数日後には次のプロジェクトのために3ヶ月ミャンマーへ。大変ななか貴重な時間を割いてくれたNhungに感謝したい。

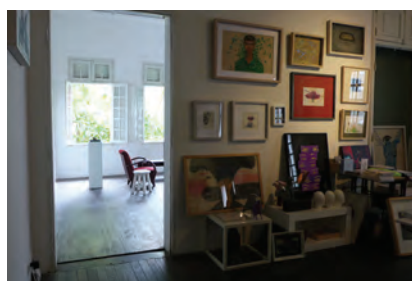


"A Travers" by Bảo at Institut français

・そんな彼女を心配しながらハノイで待っていた友人の一人が作家のNguyễn Quốc Thànhだった。今回このプロジェクトの受け入れ先となってくれたThànhにはDocLabで待ち合わせ。昨年からのプロジェクトを少しずつサポートしてくれていた彼に会うのは感慨深かった。Thànhはベトナムで有名なアート集団Nha San Collectiveのメンバーで、Queer Forever!というクィアアートのイベントも企画運営している。当初、このイベントは2年に1度だったが、今後は資金調達ができ次第開催するという。彼はまず自身の作品について説明してくれた。テクノロジーが手のひらにある、現代におけるゲイアイデンティの公私の境界線に関心があるようだ。また、彼は2014年のニパフで日本にも来日しているため、そのときの経験についても聞いた。シャイな日本の観客のために工夫をしたそうで、その内容は逆に勉強になった。映像を上映する際には、トークイベントも行うことが多く、集客はその時々で、満席になることもあり予想ができないらしい。現在は9月に予定している次回のQueer Forever!のためにプログラムをしている。チームでありDocLabスタッフのVincentとの打ち合わせにも合流させてもらった。日本の作品で何か上映できるとしたら何を勧めるかという話になり、いくつか提案した。



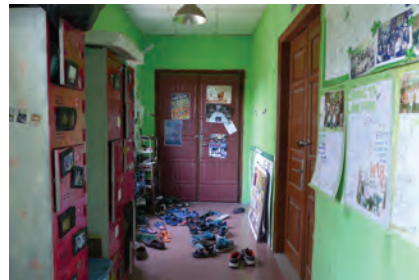
・最近までDocLabで働いていたというNganにも会えた。彼女は現在アートカフェ Manziで働いているのでManziについて説明してもらった。名前のせいか、雑誌やzineを中心とした空間かと思いきや、ちゃんとしたギャラリー空間を有し、販売しているのは主に平面アートだった。1階は天井が高いカフェになっていて、訪問時には大きな彫刻作品も置かれていた。Manziはショップとカフェがあるため、資金援助を受けずに自分たちだけでギャラリー部分も運営できているそう。ハノイでそういう空間は非常に珍しいとのこと。Nganは後に私がManziを再び訪れた際に、彼女の勤務外だったにも関わらず、わざわざDocLabで作られた作品のなかでセクシュアリティに関心のある作家による作品が含まれるDVDを3枚も持ってきてくれた。Nha San Collective（現在工事中）のスペースが入っている高層ビルHanoi Creative Cityについて彼女に聞くと渋い顔をして「あのビル嫌い」とすっぱり。19階ほどあるビルのテナントは現在半分以上が空いている。その15階にNha San Collectiveはあり、他に小さなショップやタレント事務所、ジム、1階にカフェなどが入っている。正直、錆びれた雰囲気だ。



・そんなCreative Cityに再び訪れた。この中にシェアオフィスがあり、そこで映画監督Nguyen Hoang Diepに出会った。彼女がわざわざシェアオフィスの1室を借りてくれていたのだ。しかもYxine Film FestivalのMarcus Cuong Vuも連れてきてくれた。Diepは日本でも既に2回上映され9月に福岡でも上映される長編映画『Flapping in the Middle of Nowhere』の監督。面会前日に映画の試写リンクを送ってもらったのでそこから急いで鑑賞、リサーチ。凜とし緊張感のある彼女に早速、映画の主演女優と現在のベトナムの若い俳優のトレンド、セクシュアリティ、劇中の比喩的表現などについて聞いた。淡淡と進んだが、話が欧州からの資金に及ぶと作品に対する熱い思いを語ってくれた。映画が欧州の映画祭オーディエンスを意識しすぎているという批判が国内であったらしく、それはショックで彼女を傷つけたとのことだった。「明日死ぬかもしれないのに私は映画祭のために映画を作らない。この映画は資金調達から完成させるのに5年もかかった。」と語ってくれた。



・交流基金のすぐ近くにあるTPD (The Centre for Assistance and Development of Movie Talents : 映画人材開発センター) にも訪れた。入る前から、こどもたちの靴が廊下にびっしり。中に入るとデスクトップのパソコンで小学生たちが5人ほど、アデルの曲を歌いながら、ややふざけたトーンの映像を編集している。なつかしい学童クラブのようだ。大人の姿は見当たらないので階段をあがり2階の小さなオフィスにいるスタッフに声をかけた。彼女がもう一つの部屋で中学生くらいの子達在实际に何かを撮影している様子を見せてくれた。空間としてはこれだけだが、週末には大人向けのワークショップや高校生に向けた俳優クラスもあるという。なにより、毎週金曜に行われる映画上映会+ディスカッションが面白そうだった。DocLabは実験的な姿勢があるが、ここは典型的な映画を軸にしている。DocLabでもTPDでも聞いたが、ベトナムの大学での映画教育は、いまでもプロパガンダ映画の名残があるらしく、新しい試みや教育は行われていない、というのが一般的な認識のようだ。



今後の予定や展望

・映像作品を制作する作家には面会後に試写DVDや視聴リンクをもらい、既に私が作品を鑑賞できていた作家にはそれぞれ、日本でいずれ上映したい旨を伝えた。その場で映像のデータもらった作品は1つもないので、どのように素材や字幕に関して対応していくかは今後それぞれと話すことになる。現在の想定では、1) バンコク実験短編映像集、2) Thunskas Pansittivorakul長編映画、3) 『Finding Phong』の3つのプログラムがある。将来的には、Queer Forever!のThanhにベトナム短編映像集をプログラムしてもらえればと考えている。

・それらを上映する際には、今回の会話を記事にし、公開できればよい資料として読まれると思う。

・バンコクで会った作家RatchapoomやキュレーターのChayaninは今秋ハノイで作品が上映できるとわくわくしている様子であった。ハノイに着いてNha San CollectiveのThanhがその上映を企画者だということを知った。まだ会っていない両者だが、私は会っておりその2組と私（バンコク、ハノイ、東京）のネットワークがすでにできていることを実感しとても嬉しく感じた。皆で近いうちに何かできたらいいねと話している。すでにその他の情報交換は行っている。

・それぞれの上映会などのプログラミングにアドバイスをしたり、時間があれば、プログラミング自体を依頼することも今後可能と思われる。例えば、ベトナム短編映像プログラムをそのままThanhに依頼という具合に。

・ベトナムに関しては、気になる映像作家を知ることが出来なかったが、やはりドキュメンタリー『Finding Phong』が上映できればと思っている。ただし、この映画を上映する際には、ベトナムのトランスジェンダーを取り巻くここ数年とこれからの状況の解説を含む必要がある。その点も一線で活動するアクティビストや当事者に聞いた話をまとめるとよい資料になるはずである。監督のSwannは8月に山口県の祝島で参加する映像プロジェクトがあり、そのためのリサーチなど手伝える範囲ですでに協力している。

・映画『Flapping in the Middle of Nowhere』は9月に行われるアジアフォーカス・福岡国際映画祭でも上映されるそうなので、それに合わせて今回行ったインタビューを公開する。

・映像だけではなく、その他出会った作家の作品画像とインタビューをブログにすることでより広いバンコクのアートシーンの空気を伝えることができればと思っている。



作品画像 上から
Chama Lekpla
Finding Phong
Thunskas

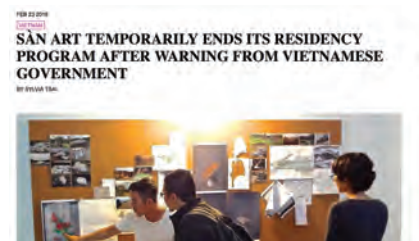
所感

・検閲について。作家には、作品について中心に聞きたかったため、検閲について深く聞けたわけではないが、やはり、直接的な政治批判は控えながらの表現になるため、暗喩的な表現になる。実際には政治的な批判の表現もスピリチュアルな表現だけのように観客に受け止められている作品もあるという。特にそれは近年のアピチャップンのタイ国外での人気のなかで見受けられるようである。

・タイでは出会った作家のうち、ケーブルテレビ放送や報道の内容も検閲を通さなくてはならない、と発言している人もいたが、私の友人でウォールストリートジャーナルのタイ支局で働く記者は、普段全く検閲を気にせずに仕事をしていると言っていた。この辺りの事実状況を確認するのはやや難しい。

・ベトナムに関しては、例えば、San Artの活動の動向が国外のアートコミュニティからも関心が集まり、メディアでも報じられることがあるが、ベトナム政府からするとそのアテンションが気に障り、結果的にSan Artの活動に支障を来すことになる、といったことが実際に起こっているようだ。サポートはしたいが気をつけなくてはならない。

・Nha San CollectiveやDocLab、Cinemathequeでも、政府からの注目を集めすぎないために、イベントの告知を思うようにできないという。そう思うとCreative Cityのビルのテナントにアート関連が少ないのは、検閲を免れるためには良いことなのかもしれない。もし、ビル全体にアート団体が入ればビルごと閉鎖される恐れがあるからだ。事実、Creative Cityの前身は8ヶ月の盛り上がりの末、行政によって閉鎖された元薬品工場だった。Zone 9と呼ばれたそこには作家やクリエイターが多く集まった。



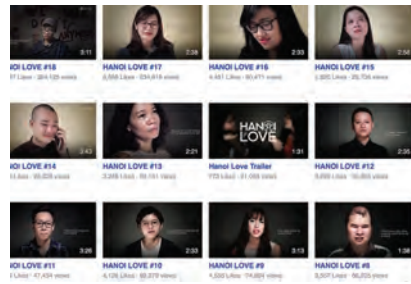
<http://artasiapacific.com>

所感

・ベトナムではよく、アーカイブや保存についての話題や活動を目にした。市民が個人的なストーリーを淡々と話すだけのビデオ『Humans of Hanoi』がFacebookで公開されていたり、面会したĐinh Thị Nhungの活動のように個人の所有物をストーリーとともにアーカイブしている人々もいる。これは、ベトナムが長く経験した侵略や植民地化の歴史、そして、社会のなかで抑圧され、存在すらを掻き消されてきた人々（例えばセクシャルマイノリティ）の存在を認識し、現在の彼らの存在を確認し、可視化を強め、世に広めるための活動だと思う。歴史を書いているのだ。これは、こういった活動が可能となった今だから行っているというだけではなく、今後いつ自分たちの存在がどのような形で抹消されるかわからないという意識も踏まえているようだった。意識しているかどうかは別に、自分の歴史や存在が抹消されるかもしれないという危機感実は、世界中のあらゆる少数派に共通する。こういう緊張感と情熱も今後のNormal Screenの活動で紹介していきたい。

・またバンコクとハノイで出会った人々の多くは、あまり語らないものの、時折、過去の戦争や植民地化、海外からの資本の介入などについて言及し、その悪影響で物事は今でも滅茶苦茶である、ということを漏らしていた。どのように滅茶苦茶なのかを聞くことはできなかった。これは、海外からの来客にあまり話すことでは無いと思われるが、もちろん彼らはそういう風を感じているということをあらためて意識し、悍ましい過去も直視しながら、同時に良い関係を築けるように心がけたい。

・今回、このような貴重な機会をいただき、素晴らしい出会いの連続に、この恵まれた状況が信じられないほどだった。バンコクとハノイでは現地の交流基金の職員のみなさんにも温かく迎えてもらい、どちらも初めて訪れる土地だったため、非常に心強く感じた。また、住んでいる場所以外でのリサーチは初めてだった私にとって、よく言われることだが、(Eメールや電話だけではなく)実際に赴き先方に会うことの重要性を強く感じた日々でもあった。直接挨拶をし、先方の住む場所の時間の流れや空気を肌で感じながら見えた世界は、期待していた以上に大きかった。ネガティブなものではないが、自分が持っていたステレオタイプの幾つかは見事に崩れ、だからこそ現地で聞いた質問もあったし、今後日本から引き続き行うリサーチとプログラミングにも深みができることが期待出来る。



<https://www.facebook.com/humansofhanoi>



Đinh Thị Nhungがキュレーションした
LGBTQアーカイブ展の資料